

## 序文

かつて弁膜症といえばリウマチ性が主でしたが、医療の進歩、社会の高齢化とともにその様相は大きく変わりました。わが国をはじめとする先進国ではリウマチ性弁膜症は大幅に減少する一方で、平均寿命が延び、加齢に伴う弁や弁輪部等の構造変化に伴う弁機能障害を呈する患者を診る機会が増えています。弁膜疾患には、術前あるいは術後の先天性心疾患に伴う病態も含まれます。さらには、腫瘍や感染に伴う弁膜症、あるいは他臓器の疾患に伴う弁膜症など、弁膜症の原因は多岐にわたります。また画像診断の進歩に伴い、弁そのものには器質的变化がないにもかかわらず心房、心室、動脈の形態変化（リモデリング）や機能障害により生じる弁膜症についても多くの知見が積み重なって参りました。ここまで弁膜症についての理解が進んだ現在では、患者ごとに弁膜症を起こしている病態を深く理解せずして適切な治療方針は立てられないともいえます。

さらに、近年は治療手段も多様性を増してきました。開心術による介入方法に選択肢が広がっていると同時に、低侵襲のカテーテル治療も一部の弁膜症には用いることができるようになってきました。

疾患に立ち向かう我々の目標は適切な治療を行い、患者の病態を改善することにあります。そのために必要な解剖、病理、生理の基礎的な事項から各疾患の病態そして診断、最終的な治療に至る内容を本書では網羅しております。また、本シリーズの特徴として心腎脳連関の観点から、腎臓専門医および脳卒中専門医のコメントやアドバイスが掲載されており、単に病変や病気を診る医療ではなく、弁膜症患者を診ることができる医療を目指した内容になっております。

本書を、比較的頻繁に遭遇する弁膜症患者の日常診療の一助としていただければ幸いです。また最後になりますが、本書の上梓にあたり多大なるご協力をいただきました執筆者の先生方に深謝いたします。

2022年6月

鳥取大学医学部循環器・内分泌代謝内科学分野（第一内科）  
教授 山本一博